

提言

新国 勇



絶滅危惧^ぐという言葉を増える機会が増えた。数が減って珍しくなったものを絶滅危惧種呼ばわりする。すこし変わって似た仲間がないような人を絶滅危惧種と表現することもある。

絶滅危惧種とは、絶滅の危機にある植物や動物のことで、急激な環境の変化や乱獲が原因といわれている。スイスに本部をおく国際自然保護連合が、1966年、

につくに・いさむ 只見の自然に学ぶ会代表。県森林文化に係る調査検討委員。県生物多様性推進協議会委員。只見町職員として町史編さんや世界ブナ・サミットの開催、只見町ブナセンターの開設に携わった後、地域の自然を見直すことによるまちづくりを続けている。

生物多様性の時代[㊦]

世界中の生き物が急激に絶滅していくのに警鐘をならすため発表されたのが最初である。それらはレッドデータブックという本にまとめ

る。04年、クロホオヒゲコウモリが只見町の奥山で24匹も捕獲されたことがある。国内でも40匹ほどしか捕獲されていない希少なコウモリである。体重は5g前後と、コウモリの仲間ではもっとも小さい。飛行能力も低く、遠くへは移動できない。ブナ天然林の樹洞に生息しているため、

絶滅危惧種の宝庫 誇りに

られた。日本では環境庁(当時)が91年に、福島県は2002年と03年にそれぞれの状況をとりまとめて刊行している。

さまざまな生き物が日本中から姿を消していく中で、本県は広範囲で多様性に富む自然環境を有している。絶滅に瀕する生き物が増えたとはいえ、まだ絶滅危惧種が数多く生息することができる自然環境をもっているのがわが福島県だ。そのことを自覚し、もっと誇りを持つべきだと思う。

20年ほど前なら、エビネやヒメサユリは県内でふつうに見られたが、いまや珍しい植物となった。アツモリソウやクマガイソウに至っては絶滅

その一方、本県は絶滅危惧種の宝庫という見方もできる。また、イヌワシは1998年、日本イヌワシ研究会の調査によって、奥会津地域に13

(次回は20日に掲載予定です)